

編集にあたって 姜尚中

巻頭言 伊東利勝

凡例

第1章

朝鮮戦争——二つの敵対国家、同一民族内の戦争

和田春樹

はじめに

金日成

(一九二二～一九四)

／朴憲永

(一九〇〇～九五)

／李承晩

(一八七五～一九六五)……

005

金日成——抗日ゲリラ將軍／朴憲永——地下に潜んだ朝鮮共産党指導者／李承晩——米国に亡命した臨政大統領／二つの朝鮮国家の誕生／武力統一への志向／金日成、武力統一の承認をうる／北朝鮮の国土完整戦／韓米軍の「北進統一」戦／中国軍の参戦／停戦会談——南北の指導者の心情／金日成、即時停戦を望む／スターリン、金日成と朴憲永を見比べる／朴憲永派の排除／交渉の進展と停戦協定調印／停戦のあと

003

その他の人物

金策／曹晩植／崔庸健／朴一禹／方虎山／南日／
李範爽／申性模／蔡秉徳／金孝錫／白善燁

055

第2章

独裁と民主の相克

太田修

はじめに

金大中

(一九二四～二〇〇九)……

065

一、政治家金大中の誕生 荷衣鳥の生家と忍冬草／「恥辱的な」創氏改名／解放直後の祖国建設の希望／朝鮮戦争、戦争のない世を夢見て／政治家を志す／五・一六軍事クーデター後に国会議員デビュー

061

二、民主化を求めて——朴正熙政権との対決 最初の大統領選／「維新体制」批判／韓国を知ってほしい／拉致事件——真実が歴史にならなければならぬ／民主化運動への復帰／獄中と法廷で深められた民主主義

三、民主革命のなかで、「ソウルの春」と光州民衆抗争／「金大中を殺すな」／米国へ亡命、帰国、政治活動の再開／民主革命と失望／三度目の敗北、留学、アジア太平洋平和財団設立
四、平和統一への礎を築く——大統領として「国民政府」出帆／日韓共同宣言「新たな日韓パ

トナーシップ」／最初の南北首脳会談／真実糾明、人権擁護、女性部の新設／「すべてが美しい」
朴正熙（一九一七～七九）…………… 096

- 一、軍人朴正熙の形成 近代化の功労者が、独裁者か？／植民地下、満洲国の軍人に／大韓民国の軍人として
- 二、権力掌握し大統領へ 五・二六軍事クーデター／日韓国交正常化とベトナム戦争参戦／絶えざる不安
- 三、「維新体制」の成立と崩壊 権限を大統領に集中／重化学工業化とセマウル運動／民主化運動の弾圧と亀裂の深まり／朴正熙の最期
- 四、植民地支配と冷戦の申し子

曹奉岩（一八九九～一九五九）…………… 111

金鍾泌（一九二六～二〇一八）…………… 113

李兌榮（一九一四～九八）…………… 116

文益煥（一九一八～九四）…………… 118

全泰壹（一九四八～七〇）…………… 120

その他の人物…………… 122

- 李承晩／尹潽善／張勉／兪鎮午／鄭一亨／全斗煥／盧泰愚／金泳三／
- 李明博／朴槿恵／盧武鉉／文在寅／金寿煥／咸錫憲／張俊河／金芝河／
- 韓勝憲／池明観／白樂晴／李泳禧／宋建鎬／朴婉緒／權仁淑／金学順

第3章 中国「改革開放」の総設計師…………… 益尾知佐子

はじめに…………… 141

鄧小平（一九〇四～九七）…………… 143

- 革命家の誕生／中国革命と毛沢東からの信頼／中ソ論争と二度目の失脚／文化大革命と「整頓」
- ／「対外開放」と党内指導権の奪回／国内体制の「改革」／改革の進展と第二次天安門事件／中国を発展のレールに引き戻す

テレサ・テン（鄧麗君）（一九五三～九五）…………… 173

胡耀邦（一九二五～八九）…………… 177

谷牧（一九一四～二〇〇九）…………… 179

劉華清（一九一六～二〇一一）…………… 182

銭学森（一九一～二〇〇九）…………… 185

屠呦呦（一九三〇～）…………… 188

その他の人物…………… 191

松下幸之助／陳雲／大来佐武郎／江沢民／胡錦濤／張芸謀／
魏京生／林毅夫／劉曉波／郎平／馬雲（ジャック・マー）

第4章

台湾の民主化と本土化

家永真幸

はじめに

李登輝（一九二三～二〇二〇）

- 一、生い立ち
- 二、農業経済学者時代
- 三、政治の道へ
- 四、総統職の継承
- 五、初代民選総統に
- 六、総統退任後

蔣経国（一九一〇～八八）

彭明敏（一九二三～二〇二二）

236 234

その他の人物

王育徳／康寧祥／高俊明／侯孝賢／鄭南榕／林洋港／郝柏村／
宋楚瑜／連戦／陳水扁／馬英九／蔡英文／魏徳聖

239

第5章

今も「生きている」香港のヒーロー

倉田
徹

はじめに

ブルース・リー（一九四〇～七三）

- 一、戦中・戦後の香港と幼少期 サンフランシスコでの誕生／香港移住、日本の香港占領／戦後香港の夜明け／子役としての活躍／詠春拳との出会い／渡米
- 二、激しく、短い活躍（一九五九～七三） アメリカでの苦闘と挫折——人種差別の壁／香港からの反撃——四本の主演作品／ブルース・リーの時代の香港
- 三、死後に残したもの（一九七三～） 突然の死と、死後も続く「活躍」／Be water——二〇一九年香港危機とブルース・リー

252 249

マレー・マクルホース（一九一七～二〇〇〇）

李嘉誠（一九二八）

279 276

李柱銘(マーティン・リー) (一九三八)…………… 281
黄之鋒(ジョシユア・ウオン) (一九九六)…………… 283

その他の人物

ジャッキー・チェン(成龍)／金庸／ウオン・カーウアイ(王家衛)／
クリス・パッテン／董建華／林鄭月娥(キャリー・ラム)…………… 287

第6章

ダライ・ラマ一四世とその家族の群像

小林亮介

——二〇世紀のチベット

はじめに…………… 291

ダライ・ラマ一四世 (一九三五)…………… 294

- 一、少年時代
- 二、中国支配下での選択
- 三、難民社会と民主主義
- 四、対話と和解に向けた決断

トウプテン・ジグメ・ノルブ(タクツェル・リンポチエ) (一九三二～二〇〇八)…………… 301

ギヤロ・トウンドウブ (一九二八)…………… 303

ダライ・ラマ一三世(トウプテン・ギヤムツォ) (一八七六～一九三三)…………… 305

パンチェン・ラマ一〇世

(プサン・ティンレー・ルンドウブ・チューキ・ギェルツェン) (一九三八～八九)…………… 307

その他の人物

ツェリン・ドルマ／ジェツン・ペマ／ロプサン・サムテン／
タクラ・プンツォク・タシ／ガプー・ガワン・ジグメ(阿沛・阿旺晋美)／
プンツォク・ワンギェル(平措旺傑)／李維漢…………… 284

第7章

冷戦と権威主義的独裁体制の成立

伊東利勝／今井昭夫
新谷春乃／玉田芳史
田村慶子／左右田直規
中野 聡／増原綾子
菊池陽子

はじめに…………… 315

ベトナム

ホー・チ・ミン (一八九〇～一九六九)…………… 322

生い立ち／世界各地を遍歴、フランスで共産党入党／コミンテルンの活動へ／ベトナム共産党の

設立／不遇の時期／一九四五年八月革命と独立／ベトナム民主共和国樹立／第一次インドシナ戦争／北部での社会主義建設、南部の解放闘争／死後と顕彰・神格化

カンボジア

ノロドム・シハヌーク (一九二二～二〇二二)

ノロドム家とシソワット家の血を引く者の即位／政治意識の目覚め／「独立のための十字軍」／シハヌーク体制第一期―成立と繁栄／シハヌーク体制第二期―中立政策の揺らぎ／シハヌーク体制第三期―衰退／一九七〇年三月のクーデタによる失脚／民主カンプチア体制下の軟禁生活／三派連合の顔／カンボジアへ帰還し、再び王になる

ホル・ポト (一九二五～二八〇九八)

タイ

サリット・タナラット (一九〇八～六三)

生い立ち／権力闘争の勝者／サリットの革命／君主制復権／経済開発／冷戦とアメリカ

ラーマ九世 (プーミポンアドウンヤデート) (一九二七～二〇一六)

シンガポール

リー・クアンユー (一九二三～二〇一五)

豊かなプранаカン家庭に生まれる／シンガポール初代首相に／開発独裁体制の構築／アジアの価値／「中国の影」の払拭と中国への接近／台湾との「特別な関係」／占領の記憶を背負った対日関係／リーの死

マレーシア

マハティール・モハマド (一九二五)

生い立ちと占領体験／医学と政治との出会い／波乱に満ちた政治家人生の始まり／新たな開発戦略と党分裂―第一次政権前期／新国家構想と通貨危機・アンワル追放―第一次政権後期／言論活動と反対陣営への参入／マハティール政治の思想と行動

フィリピン

フェルディナンド・マルコス (一九一七～八九)

生い立ち／議会政治家から大統領へ／戒厳令と民主制の終焉／「ピープル・パワー革命」

インドネシア

スハルト (一九二二～二〇〇八)

貧農の子から中部ジャワ軍管区司令官へ／九・三〇事件と政治の表舞台への登場／新秩序体制の「秩序」／開発独裁の功罪／改革運動とスハルトの辞任

ビルマ (ミャンマー)

ネー・ウイン (一九一〇～二〇〇二)

武装政治集団「国軍」の形成／国軍総司令官／社会主義的国民国家の実現へ向けて／革命政権／富農・小資本家の抵抗／国家の維持を優先／孤立的非同盟中立主義／アメリカの脅威／中国共産党の干渉／国際機関からの援助受け入れ／民政移管／社会主義路線の修正／国際資本主義経済の荒波／社会主義路線の敗退／遺産は国軍中心社会のみ

ラオス

カイソーン・ポムウイハーン（一九二〇～九二）

東ティモール

シヤナナ・グスマン（一九四六～）

その他の人物

チュオン・チン／ファン・セン／ヘン・サムリン／ソン・サン／
ノロドム・ラナリット／タノーム・キットイカチョーン／ゴー・チョクトン／
トウンク・アブドウル・ラーマン／アブドウル・ラザク・フセイン／
ムスタファ・ハルン／ハサナル・ボルキア／ラモン・マダサイサイ／
ルイス・タルク／ベニグノ・アキノ・ジュニア／ウー・ヌ

428

423

420

第8章

冷戦期の「熱戦」、ベトナム戦争

今井昭夫

はじめに

443

レ・ズアン（一九〇七～八六）

452

一九五〇年代までのレ・ズアン——南部での長い活動歴／ベトナム労働党第一書記時代／ベトナム戦争終結後

ゴ・デイン・ジエム（一九〇一～六三）

458

フランス植民地期のジエム／ベトナム独立後のジエム／ベトナム共和国大統領に就任／アメリカとの軋轢

ヴォー・ゲエン・ザップ（一九二一～二〇一三）

464

レ・ドウツク・ト（一九二一～九〇）

467

グエン・ヴァン・ティエウ（一九二三～二〇〇一）

470

グエン・ヒユウ・ト（一九二〇～九六）

473

その他の人物

476

グエン・チー・タイン／トー・ヒユウ／ファム・フン／グエン・ヴァン・リン／
グエン・ティ・デイン／ファム・ヴァン・ドン／ヴァン・ティエン・ズン／
デイン・ヌップ／グエン・ティ・ビン／チャン・ヴァン・チャー／
フィン・タン・ファット／ズオン・ヴァン・ミン／グエン・カオ・キー／
ロバート・S・マクナ馬拉／ヴァン・パオ／ロン・ノル／
ヘンリー・キッシンジャー／スパースウオン／バオ・ニン／
チン・コン・ソン／ティック・ニヤット・ハイン／ファム・コン・ティエン

独立インドの国民国家建設 ——「世界最大の民主主義」の挑戦

中溝和弥

はじめに

493

ジャワールハルラール・ネルー（一八八九～一九六四）

497

- 一、インド独立運動の系譜
- 二、独立運動に参加するまで　ネルー家の歴史／ネルーの青春時代／インド帰国／ガンディーとの出会い／カマラとの結婚
- 三、独立運動への参加　第一次世界大戦とインド／ローラット法反対運動／ジャリアンウォーラーバグ虐殺事件／農民との出会い
- 四、独立運動の三つの系譜とネルー　暴力的運動との関係／会議派内部での政治的立場——ガンディーとの関係／宗教との関係
- 五、世界史のなかのインド独立運動　インドの国民統合／ファシズムへの抵抗
- 六、印パ分離独立　印パ分離独立をめぐる学説／会議派とムスリム連盟の対立／ネルーのムスリム理解／分離独立の責任／インド独立
- 七、独立インドの建設　世俗主義／民主主義／社会主義／ネルー外交
- 八、晩年
- 九、民主主義にかけた生涯

ヴァツラブバーイー・パテール（一八七五～一九五〇）

556

ジャヤプラカーシユ・ナーラーヤン（一九〇二～七九）

560

インデイラ・ガンディー（一九二七～八四）

567

ラージーヴ・ガンディー（一九四四～九二）

575

その他の人物

580

ヴィナーヤク・ダーモードル・サーヴァルカル／

ケーシャヴ・バリラーム・ヘードデーワール／

シヤーマ・プラサード・ムカジー／モーラルジー・デーサーイー

ジハードの遂行をめぐつて ——冷戦と代理戦争、内戦、対テロ戦争

山根 聡
小松久男

はじめに

591

アフガニスタン

ブルハーンヌッディーン・ラッバーニー（一九四〇～二〇二二）

グルブツディーン・ヘクマタイヤール（一九四九～）

アブル・アアラール・マウドウーデイー(一九〇三〜七九) /
ムツラー・ムハンマド・ウマル(一九六〇〜二〇一三)……………593

大戦後のアフガニスタン——冷戦下の近代化政策／ラッバーニーとヘクマティヤール——イスラーム研究会に集った青年ムスリムたち／アブル・アアラール・マウドウーデイー——イスラーム復興思想／ダーウード政権と反政府運動の激化／サウル革命とソ連軍の侵攻／ムジャハーディーン群像／ソ連軍の撤退と軍閥間の内戦／ムツラー・ムハンマド・ウマル——ターリバーンの誕生／アル・カーイダの反米活動／column 中村哲医師のペシヤワール会／対テロ戦争の果てに

中央アジア

ヒンドウスターニー(一八九二〜一九八九)……………629

イスラーム学者の矜持と試練／ムスリム宗務局と東洋学研究所／私塾と弟子たちの離反／ヒンドウスターニーの革新派批判／ヒンドウスターニー没後の動向

その他の人物

ヌール・ムハンマド・タラキー／ハフイーヅツラー・アミーン／
バブラク・カールマル／グラーム・ムハンマド・ニヤーズイー／
アフマド・シャー・マスウード／ナスイールツラー・ハーン・バーブル／
イシャーンハン・ババハン／ハージー・アクバル・トウラジヤンザデー／
ムハンマド・サーディク・ムハンマド・ユースフ／
サイイド・アブドゥウツラ・ヌーリー／ジュマ・ナマンガニー／アブドゥウワリ・カリ

643

第11章

大国支配に抵抗する新時代の幕開け

吉村慎太郎

——イラン・イスラーム政治運動の展開と葛藤

はじめに……………653

ホメイニー(一九〇二〜八九)……………655

父の非業の死と権力者に対する憎悪／芽生え始めた指導者の自覚とレザー・シャー独裁／親米シャー独裁政権との対決／革命の勝利と挫折——厳しい現実との葛藤

シヤリーアテイー(一九三三〜七七)……………671

バーザルガン(一九〇七〜九五)……………674

シヤリーアトマダーリー(一九〇五〜八六)……………676

その他の人物

ハーメネイー／ラフサンジャニー／モンタゼリー／
ハータミー／アフマデイーネジャード／ロウハーニー……………678

はじめに

687

ナセル（一九一八～七〇）

690

- 一、ナセルの生い立ちと青年時代 ナセルの呼称・出身について／政治的に早熟であったこと／転機となった一九三六年／若手将校時代／ムスリム同胞団と共産主義組織への接近／パレスチナ戦争の衝撃から自由将校団の結成へ
- 二、七月二三日革命の決行 革命前夜／革命の成功／農地改革から議会制民主主義の否定へ／権力闘争の開始と「革命」体制の成立
- 三、老獪な戦術による権力掌握とその結果 最後の権力闘争へ——ムスリム同胞団との対決／三月危機——ナギーブとの権力闘争
- 四、アラブ革命の絶頂から凋落の道へ 革命外交の幸運な船出／アラブ民族革命の高揚／凋落への道

ムハンマド・ナギーブ（一九〇一～八四）

724

アブデルハキーム・アームエル（一九一九～六七）

726

アンワル・サーダート（サダト）（一九一八～八二）

729

サイイド・クトゥブ（一九〇六～六六）

732

その他の人物

735

ファールーク国王／ムスタファー・ナツハース／アリー・マーヘル／
 ハサン・アルバンナー／ハサン・ホダイビー／ヘンリ・クリエル／
 アハマド・サーディク・サアド／シユフダイー・アティーヤ・シャーフイイー／
 ハーレド・モヘッディーン／アブデルラティーフ・バグダーディー／
 サラーハ・サーレム／ガマル・サーレム／ユースフ・シッディーク／
 アブデルラッザーク・サンフリー／アハマド・フセイン／
 ムハンマド・ハサネイン・ヘイカル／ドリヤ・シャフイーク／
 ウナム・クルスム／ナギーブ・マハフーズ／ヌーリー・サイード／
 アブデルカリーム・カーセム／ミシエル・アフラク／ファイサル国王／
 ヤセル・アラファト／ダヴィッド・ベンダリオン

パレスチナ解放を目指した指導者

はじめに

749

ヤセル・アラファト（一九二九～二〇〇四）

753

- 一、ナクバまでのアラファト
- 二、ナクバ時のアラファト
- 三、パレスチナ戦争後のエジプトでのアラファト
- 四、クウェートでのアラファトとファタハの結成とその活動
- 五、第三次中東戦争後のアラファトと武装闘争
- 六、チュニジアでのアラファトと和平攻勢
- 七、オスロ合意とアラファトの帰還
- 八、パレスチナ自治政府でのアラファト
- 九、アラファトの晩年の評価

その他の人物

イツハク・ラビン／アリエル・シヤロン／
フセイン・ヨルダン国王／アフマド・ヤースイーン

778

第14章

アジアの経済発展モデル日本 高成長導入部——日本資本主義(第二次大戦後)

武田晴人

はじめに

石坂泰三(二八八六～一九七五)

786

第一生命入社まで／東芝の労働争議の解決／経団連会長に就任／自由化の推進／市場経済への
信頼とその限界／万国博覧会の開催

783

小林中(二八九九～一九八二)／桜田武(二九〇四～八五)

800

松永安左エ門(二八七五～一九七二)／木川田一隆(二八九九～一九七七)

802

出光佐三(二八八五～一九八二)／和田一夫(二九二九～二〇一九)

806

その他の人物

石川一郎／土光敏夫／日向方斉／盛田昭夫／松下幸之助／

809

本田宗一郎／中内功／稲山嘉寛／高碕達之助

第15章

野坂参三と宮本顕治

和田春樹

はじめに

野坂参三(二八九二～一九九三)／宮本顕治(二九〇八～二〇〇七)

818

日本共産党の誕生と野坂参三／日本共産党の発展と宮本顕治／戦争と闘った人、闘えなかった人
／戦後の日本共産党と野坂参三／六全協以後の二人

817

戦後日本の保守政治家たち

姜尚中

はじめに……

833

岸信介（一八九六～一九八七）……

836

- 一、岸信介という「迷宮」 国家を背負った秀才／「狂瀾怒濤」の青春
- 二、満洲国／A級戦犯 戦争国家のエンジニア／獄窓の中から
- 三、保守合同への道 政治力の結集／「中央突破」への序曲／保守合同への「中央突破」
- 四、国家と国民 安保改定への「けもの道」／未完のプロジェクト

吉田茂（一八七八～一九六七）……

870

その他の人物

878

佐藤栄作／池田勇人

戦後民主主義の成立と
蹉跌をめぐって杉田 敦／趙星銀
孫 歌／新倉貴仁
乙部延剛

はじめに……

883

丸山真男（一九一四～一九九〇）……

886

生涯と著作／丸山の論理と方法／日本社会の診断／日本社会への処方箋／丸山のパスベク
タイプ

清水幾太郎（一九〇七～八八）……

897

竹内好（一九一〇～七七）……

900

鶴見俊輔（一九二二～二〇一五）……

907

吉本隆明（一九二四～二〇二二）……

970

藤田省三（一九二七～二〇〇三）……

914

松下圭一（一九二九～二〇一五）……

918

江藤淳（一九三二～九九）……

921

はじめに……

929

水木しげる（一九二二～二〇一五）……

933

一、生涯

二、戦記漫画と戦争体験の表象

三、お化け漫画と民俗学

四、社会風刺の数々 政治権力と名誉心の虚妄／騙し騙される人間社会の本質／究極の幸福とい

う観念／失われたユートピアをめぐる悲嘆

五、達観したユーモア

手塚治虫（一九二八～八九）……

964

村上一郎（一九二〇～七五）……

968

奥崎謙三（一九二〇～二〇〇五）……

972

南方熊楠（一八六七～一九四一）……

976

白土三平（一九三二～二〇二一）……

980

その他の人物……

984

加太こうじ／長井勝一／つげ義春

近代のアイヌ民族の足跡

成田龍一

——セトラー・コロニアリズムへの対抗

はじめに……

989

知里幸恵（一九〇三～三二）……

993

生い立ち／『アイヌ神謡集』に描かれたもの

違星北斗（一九〇二～二九）……

999

生い立ち／短歌という形式

菅野茂（一九二六～二〇〇六）……

1004

生い立ち／アイヌ民族の文化継承

鳩沢佐美夫（一九三五～七二）……

1008

はじめに

大田昌秀（一九三五～二〇一七）

アメリカ公民権運動との出会い／瀬長亀次郎——島ぐるみ土地闘争の勃発／屋良朝苗——コザへの経済封鎖令の中で／言論人・歴史家としての出発／「事大主義」を超えて／大江健三郎、木下順二・丸山真男、竹内好——「日本」と「沖縄」／「醜い日本人」の衝撃／「第四の琉球処分」／新たな運動の創出／「代理署名」事件の中で

1016 1013

執筆者一覧

写真提供・図版出典

凡例

- ・本書の構成は、章ごとにまず中心となる人物について述べ、次いで当該人物を取り巻く重要な人物について、さらに関連する人物について、項目を立てて述べている。ただし、例外的にこの構成を採らない章もある。
- ・本文中、その章で項目を立てた人物名等の初出に「▼」を付した。
- ・漢字表記については、原則として常用漢字を用いた。
- ・人名および地名等については、平凡社の『世界大百科事典』、『エリア事典』シリーズ、岩波書店の『岩波イスラーム辞典』、『古代オリエント事典』、その他の各種事典類を参照しつつ適宜検討し、採用した。
- ・ふりがなについては例外を除き、日本と中国の人名および地名等については日本語の読みによるひらがな表記、その他の漢字圏の人名および地名等については現地音によるカタカナ表記で付した。
- ・外国語文献の日本語訳については、特に断りのないものは執筆者による。また、日本の古典籍等については執筆者により適宜読みやすく整理した場合がある。
- ・引用文中の執筆者の補注については原則として「」を使用した。
- ・年代は原則として西暦（新暦）表記とした。月日については、西暦採用以前の東アジア地域では旧暦のままとした章もあるが、それ以外の地域については、特に断りのないものは西暦表記とした。
- ・イスラーム圏におけるヒジュラ暦等、西暦への換算にあたって二年にまたがる場合、原則として下一桁を「／」でつなぎ表記した（「一四〇〇／一年」等）。
- ・人物の満年齢と数え年については執筆者の表記を尊重した。